

みんぱくリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

世紀末の夢 マルドリュス版

マルドリュス版の人気

日本でもつとも読まれているアラビアンナイトは、英語から訳したバートン版とフランス語からのマルドリュス版でしょう。マルドリュス版は一八九九年から一九〇四年にかけて出版されました。日本語訳が完成したのは第二次大戦後のことですが、流麗な日本語訳もありまつて多くの愛読者を獲得してきました。

バートンの宣伝文句を信じてしまった南方熊楠が、バートン版こそが原典にもつとも忠実な翻訳だと思つてしまつたように、マルドリュスの前書きを真に受けた人たちも、マルドリュス版こそが決定版アラビアンナイトだと信じてしまつました。マルドリュスは自著の前書きで「アラビアの原文が単に文字を変えられ、フランス文字に変えられたに過ぎぬ」忠実な逐字的完訳であることを強調し、次のように記しています。

……誠実にして論理的な、唯一の翻訳方法が存在する。すなわち、まさにまばたく瞼のつかの間の皺しわほども弱められない没我的逐字訳を行い、心ゆくまで味識すること……。この方法は暗示的なるがゆえに、最大の文学的迫力を生じ、歡喜の欣びを与える。（『千一夜物語 1』岩波書店）

ところがボルヘス（一八九九～一九八六）は「千一夜物語の翻訳者たち」というエッセイの中で、「青銅の町の綺譚」（第三三九夜～三四六夜）を引いて「マルドリュスの誠意を疑う」と述べています。該当箇所を岩波書店版から引用してみましょう。

……水は、この泉水に注ぐために、この部屋の床に掘られた美しい形状の四つの溝に添うて流れてくるのでしたが、どの溝も、独特の色の床を持つていました。第一の溝の床は雲斑石の床でしたし、第二番目のは、黄玉、第三番目のは、エメラルド、第四番目のは、トルコ玉でできていました。したがって、水は、一つ一つの床の色によって彩られ、天井の絹布に漉されて柔らかになつた光を受けて、あたりの品々や大理石の壁に、海の風景のような和らぎを投げかけていました。

この箇所はバートン版では次のようになっています。

……床の水路を流れる水はさまざま色あいの大理石で作られた、たいそう大きな貯水池へ落ちていたのでござります。（「真鍮の都」）

バートンと同じカルカッタ第二版から訳した東洋文庫版では次のとおり。

……水流はかの四つの客間の床の水路を流れ、こうして出来た四つのせせらぎは、色様ざまの大理石で造った大きな池に流れこんでおりました。（「黄銅城の物語」）

多国語に通じていたボルヘスは三つのドイツ語訳と二つの英訳の該当箇所を確認し、マルドリュスは原文にはないものを描いて色づけした、こういうことができるのは挿絵画家であつて翻訳者ではないと述べています。バートンが原文にはない性愛描写を書き加えたように、マルドリュスの流麗な筆は華々しくも幻想的な東洋の姿を描き出したのです。マルドリュス版が愛読されたのは、文章の妙もさることながら、文字のあいだから絵のように浮き上がつてくる豊麗なイメージにもあつたと言えるでしょう。

また、バートン版とは違つた視点で官能的な女性像を造りあげたという点も指摘されてき

ました。つまりバートン版の女たちには、ときとして煩惱^{ぼんのう}のままに情熱的な道を突き進んでいくイメージが加味されているのに対し、マルドリュス版の女たちには、艶かしくも優しい心遣いをもつて男につくす純情可憐な風情が与えられているというのです。バートン版もマルドリュス版も方向の違いこそあれ、それにヨーロッパの脳内妄想によつて脚色されたいたと言えるでしょう。

マルドリュス版が出版されるまでフランス語圏の人々はもっぱらガラン版に親しんでいましたが、十八世紀の宮廷文化にそつた色づけがなされていたガラン版は時流にあわなくなつていきましたから、官能的かつエキゾチックなオリエンタリズム絵画をながめるかのごときマルドリュス版が人気を博したのは自然な成り行きでした。

ジョゼフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリュス



ジョゼフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリュス (1868~1949)

ジョゼフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリュス（一八六八～一九四九）はカイロに生まれ、最初はレバノン、次いでパリで医学教育を受けました。マルドリュス家の先祖はコーカサス出身だったようですが、マルドリュスの祖父はナポレオンのエジプト遠征のさい

にフランス軍の会計担当官としてエジプトに渡り、そのままカイロに留まつてムハンマド・アリーの財務顧問にまで出世しています。なおカイロで裕福な暮らしを送つていたマルドリュス家は、カトリックの信者でした。マルドリュスの妻となつたリュシー・ドラリュ・マルドリュスは女流作家として知られており、いくつかの作品を残しています。

フランスで医学を修めたマルドリュスは、内務省の衛生官となり、モロッコをはじめとする北アフリカのフランス植民地で勤務しました。文学界に友人が多く、ステファヌ・マラルメ（一八四二～九八）、アンドレ・ジード（一八六九～一九五一）、マルセル・ブルースト（一八七一～一九二二）、モーリス・メーテルリンク（一八六二～一九四九）らとは親しいつきあいがありました。彼らはいずれもマルドリュス版アラビアンナイトの愛読者でした。ジードやメーテルリンクによる情熱的な賛辞は、『マルドリュス版 千一夜物語 第一巻』（岩波書店）の巻末に収録されています。またブルーストの『失われた時を求めて』の中に、アラビアンナイトをめぐるエピソードがたびたび登場していることはよく知られています。

アラビアのロレンスことトマス・エドワード・ロレンス（一八八八～一九三五）もマルドリュス版の愛読者でした。一九二三年、彼はマルドリュス版を英訳する相談を受けます。ロレンスは「バートン版は読むに耐えない」と言いきり、マルドリュス版の翻訳には意欲的でしたが、この企画は、版権がとれなかつたために流れてしまいました。というのも同年、ポーヴィス・マザーズによる英訳が出版されたからです。ポーヴィス・マザーズによるマルドリュ

ス版の英語訳は高く評価されているのですが、『必携アラビアン・ナイト』の著者アーウィンは「ポーイス・マザーズの訳はよくできているけれども、（マルドリュス版を）翻訳する価値があつたかどうかは別問題」と手厳しい言葉を述べています。

マルドリュスはアラビア語原典から持ち出してきたパーツを組み立てて、時としてオスカー・ワイルドかステファン・マラルメが書いたのではないかと思われるような大げさな改竄版アラビアン・ナイトを作り上げた。マルドリュスが編んだこのアラビア物語集は、遅れてやつてきた「世紀末」趣味の作品であり、阿片の幻想、使いきれぬ金銀財宝、失われた楽園、哀調を帯びた絢爛華麗、贅美を凝らした小部屋につながれたハーレムの美女が渾然となつた幻想の東洋の絵姿なのだ。（『必携アラビアン・ナイト』、平凡社）

このようにマルドリュス版に描かれた中東のイメージが文学的な幻想であることを忘れてはなりませんが、その一方では多くの読者を魅了したマルドリュス版のおかげで、アラビアンナイトに親しみ、ひいては中東の文化に関心をいだく人が増えたことも否めません。ボルヘスにしても、マルドリュス版は（バートン版の次に）読みやすいと褒めています。

マルドリュス版の底本

ではマルドリュスはどのようなアラビア語原典を底本にしたのでしょうか。先ほど確認したように、マルドリュス版にはカルカッタ第二版には載っていない一節が記されていました。

マルドリュス版は、エジプトで編集されたブーラーク版をもとに訳したということになりますが、開巻早々からガラン版と似通つた箇所もあるようです。マルドリュス版第九夜から第十八夜に入つては、「バグダードの荷担ぎ男と三人の娘」を見てみましょう。豪壮なお屋敷にやつてきた荷担ぎ男を相手に悪ふざけをはじめた三人娘が、全裸になつてじやれあう場面で知られた物語です。マルドリュス版を見ると、三人の娘にはそれぞれゾバイダ、アミナ、ファヒマという名前がついているのですが、バートン版にも東洋文庫版にもこの名前は出できません。ガランが底本にしたガラン写本にも娘たちの名は書いてありませんし、ブーラーク版を底本にしたレイン版にも出できません。ところがガラン版にはゾバイダ、アミナ、サフィイという名が出てきます。娘たちに名をつけたのは、どうやらガランのおせつかいだつたようです。

この物語は、バルマク家の宰相ジャアファルらを連れてお忍びでやつてきたカリフ、ハールーン・アッラシードが、次々とおこる不思議なできごとの謎を知るために、娘たちの身上を聞き出す筋立てになつており、黒犬をさんざんに鞭打つたあとに号泣した屋敷の女主人

と、恋の歌を歌ううちに胸がいっぱいになつて倒れてしまつたもう一人の娘が、自分たちの身にふりかかつた数奇な運命を語つています。

バートン版、東洋文庫版、レイン版、マルドリュス版では、女主人に続いて身の上を語るのはお屋敷の門番をしていた娘なのですが、ガラン版では門番ではなくて、荷担ぎ男を連れて買い物をした娘（ガラン版ではアミナ）が不幸な結婚の顛末を語つています。ところが原典のガラン写本では、結婚話を語るのは門番の娘（ガラン版ではサフィ）ですから、ガランの単純な誤読だつたかもしれませんし、話の前半部分で出番が多かつたアミナに焦点をずらせたガランのいきすぎた読者サービスだつたのかもしれません。

一方、マルドリュス版では、不幸な結婚の顛末を語るのは他の版と同じように門番の娘なのですですが、彼女にはアミナという名前がつけられています。ともあれこの話に関しては、マルドリュスがカルカッタ第二版やブーラーク版などのアラビア語原典ではなく、「原典に忠実でない」としてジードにこつぴどくこきおろされたガラン版を下敷きにしてうまく混ぜ合わせた可能性もありそうです。

マルドリュス版の種本

マルドリュスの翻訳があやしいことは、刊行中から指摘されてきました。「没我的逐字訳」であるはずの訳文とブーラーク版がくいちがつてゐるからです。するとマルドリュスは、自

分が翻訳の底本にしているのは北アフリカ（チュニジア）に伝えられた十七世紀の写本だと主張しました。その写本こそ、ブーラーク版が編集されるさいの親本だというのです。現在のところ、マルドリュスの言う十七世紀の北アフリカ写本は確認されておらず、言い逃れだつたのだろうということで一応の決着がついています。

マルドリュス版には、ガラン版はもちろんのこと、バートン版やレイン版にも入つていな話が数多く収録されています。特に十二巻から十六巻に入つている話の多くは、どのアラビアンナイト刊本にも載つていません。たとえば第九三七夜から第九五四夜にかけて続く「バイバルス王と警察隊長たちの物語」に入つているほとんどすべての話は、一八八三年に出版された『現代アラブの話』（ギヨーム・スピッタ・ベイ）からの剽窃ひよせつであつたようです。

また、第九九四夜から九九八夜にかけて語られている伝奇的な「ジャアファルとバルマク家の最期」は、十九世紀にフランス語で出版された『アラブの女性』——イスラーム以前と以後』という本からとつたとされています。ただしこの話はアッバース朝の大歴史家タバリーが残した『諸預言者と諸王の歴史』と題する、中東の歴史をかじつた人なら誰もが知る名著に載つており、前掲書ではじめて紹介された話ではありません。

同じように、第九七一夜からはじまる「知識と歴史の天窓」という一連の物語群にしても、マルドリュスが十九世紀のフランス語書籍をはじめとする別資料から抜き取つてきたものだとされています。このようにマルドリュスは、ブーラーク版、ガラン版に入つていたいわゆ



パリ・サンジェルマンにあるマルドリュスの書斎。
遺族の方(中央)と自筆原稿等の遺品を整理する調査チーム。(著者撮影)

る「孤児の物語」(アラジンやアリババなど)、ブレスラウ版、十九世紀に出版された『ナイル渓谷の民話』、先ほど紹介した『現代アラブの話』『アラブの女性—イスラーム以前と以後』などから物語を拾つていったようです。

アリババについては、モルジアナが兄カシムの家の女奴隸ではなくてアリババの養女になっています。アリババの原典写本は確認されてないわけですから、これはマルドリュスの脚色でしょう。シンドバッド航海記にしても、新旧二種類のテキストで大きな異同のある第六航海の後半部と第七航海では、二つのテキストを混ぜ合わせています。

マルドリュス版が映し出すもの

このようにマルドリュス版は、本人が主張したように未発見のアラビア語原典からの翻訳ではありませんでした。しかしながらアラビアンナイトという物語集の性質を考えるなら、はつたりをきかせすぎた点は批判できるものの、彼の編集作業を全面的に責めることもできないでしょう。そもそもアラビアンナイトとは、特定の個人の手になる作品ではなく、編集の手が入るたびに新しい形をとる動的な存在なのです。近世の中東で編集された諸写本にしても、題名と枠物語、冒頭のいくつかの物語を別にすると、定まった編集基準があつたようには見えません。つまりアラビアンナイトは、編集されるたびに新しい物語集として再生産されてきたのです。

ブーラーク版にしても当時のエジプトで知られていた話を寄せ集めて成立したものでしたから、ナポレオンのエジプト遠征に同行した画家ドゥノンを魅了したというアラブの語り手のレパートリーが、ブーラーク版に採録されている可能性も否定できません。また、中世のアラブ世界で物語集を編むさいにも、さまざまな文献から話を拾つてきたようです。このように考えてみるとマルドリュス版は、いかにもアラビアンナイトらしいアラビアンナイトだと言えるのかもしれません。

幻の未発見写本を盾にして底本を明示しなかつたのは不誠実だったかもしれません、マ

ルドリュスは写本や民話に関する資料を数多く収集していたようです。最近、マルドリュスの遺族にあたる人にインタビューできましたので、残された膨大な遺品を目にすることができました。まだ確認中なのですが、調査が進めばマルドリュスの手元にあつた情報が解明できることかもしれません。

ただしアラビアンナイトが中東の民話や古伝説を土台にしているにしても、バートン版やマルドリュス版が伝えるものは中東の現実ではなくてヨーロッパの幻想であつたという点を見逃してはならないでしょう。中東は、ヨーロッパが相対する他者でした。ときに応じて敵対し、手をつなぎ、学びとり、影響を与えあいながらも決して同一化することのないものとして、あるときには純然たる幻想であり、一方的な夢を託す相手であり、逆に自らの敵意を反映する鏡でもありました。そしてヨーロッパはその鏡を見ることによって、自分の輪郭を確認し、自分の本質を規定したのです。

わかりやすく言えば、バートン版やマルドリュス版から見えてくるものは、中東の姿ではなくて中東を見るヨーロッパのまなざしなのです。世紀末の夢を背負つて登場したマルドリュス版は、絢爛たる東方幻想のエッセンスがつまつた作品だと言えるでしょう。